

# 彼岸過迄

## 映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1912) 「朝日新聞」

参考：里見弴『彼岸花』監督：小津安二郎 (1958)

脚本：野田高梧 小津安二郎

出演：平山渉 佐分利信 佐々木幸子 山本富士子  
平山清子 田中絹代 三上周吉 笠智衆  
平山節子 有馬稲子 三上文子 久我美子

あなたは卑怯です。徳義的に卑怯です。

『彼岸過迄』という題名は、漱石の前書によれば、元日からはじめて、彼岸過迄に書く予定という理由から名づけたという。

久しぶりだから成るべく面白いものを書かなければ済まないという気がいくらかあるともいう。これは修善寺の大患で入院していたこともあり、新聞小説の連載が久しぶりという意味だろう。

しかし、『彼岸過迄』が面白い小説とは私には思えなかった。敬太郎という大学の法学部を卒業して、就職口を探している青年が主人公の話だと思っていると、そのうち須永の話になり、最後は松本の話になる。

須永は敬太郎の友人で、松本は須永の叔父。二人とも高等遊民で、働いていない。敬太郎は就職する気はあっても、最初のうちはやはり遊民だ。

いったい誰が主人公か。敬太郎の話も須永の話も松本の話も尻切れとんぼで終わる。もっぱら話の筋を追っている私のような読者はこの小説のどこが面白いのかわからない。頭をきりかえ、『文学論』を参考しながら読み直す必要がある。

須永市藏は敬太郎同様、大学の法学部を卒業しており、頭も悪くないが、まったく働く意志がない男だ。叔母（母の妹）の娘の田口千代子との結婚を母親が望んでおり、本人も千代子が嫌いではないのだが、結婚となると消極的となる。そのくせ千代子が高木という男との関係を嫉妬する。



## 彼岸過迄

映画文学人生論

とうとう千代子から、「貴方は卑怯です。徳義的に卑怯です」と言われてしまった。そこまで言われても市藏の態度は相変わらず煮え切らない。

一方、松本には妻と四人の子供がいる。高等遊民とはいえ。家長だ。四人の子供のうち二歳の女の子が雨の降る日に死んでしまった。それ以来、雨の降る日に紹介状を持って会いに来る男が嫌いになったという。漱石は五女雛子を二歳のとき亡くした。その経験を書いたとすれば、松本のモデルは漱石だが、漱石が主人公とは思えない。結末は次の通りとなっている。

敬太郎の冒険は物語に始まって物語に終った。彼の知ろうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼は遂にその中へ這入って、何事も演じ得ない門外漢に似ていた。彼の役割は絶えず受話器を耳にして、「世間」を聞く一種の探訪に過ぎなかった。

つまり、この物語は、門外漢による「世間」の探訪記。ということでは敬太郎は主人公でない。考えるのが面倒になったので、小津安二郎監督の映画『彼岸花』を観た。題名が類似しているというだけの理由。深い仔細はない

雨の降る日の尼寺や彼岸花